

奮闘の記録 ～地震当日からの2週間～



1月18日（水）

悪夢の1月17日に引き続き、朝未だ明けきらぬうちから怪我をされた患者さんや家族や知人の安否を尋ねる人々が続々と病院の受付に見える。長田、兵庫の火災は昨日より衰えるどころか却って勢いを増し、又、時折起きる余震が住民の方々の不安を増す。

本日も昨日に引き続いて一般診療は不可能なので、救急対応のみで一階のロビー及び診察室で患者さんに相対する。スタッフの殆どの人は不眠不休の活躍を強いられる。

朝方、漸く院長との間に電話が通じた。昨日から何回も病院へ車で行こうと試みたが殆ど前進をせずあきらめて今日これから徒歩で病院に向かわれると言われる。明石から兵庫まで5～6時間を要するだろう。

昨日入手したパンと夜中に本部から届いた水とおにぎりが本日の食糧で患者200名、職員200名、避難者200名の生

命の糧であり、それをどう分けようかとの打合せから朝のスタートである。

午前中、市から給水車が来たので看護婦さんも総出で飲み水の確保にあたる。近所の住民の方々も沢山並んで水を待つ。

2時過ぎ院長先生が来院。院長室は机、本箱、書類等ひっくり返っている。婦長から退院しても良いほど回復した患者さんがおられるが自宅が潰れて帰るところがないため、退院できずベットを明けられないので新しい患者を受け入れることができないとの申し出があり、2階の消化器センターを急拵えの受け入れ場所にした。

大阪本部へは電話が通じないが東京へは電話がつながるので東京経由で大阪の救援本部へ食糧の供給を依頼したところ、水とおにぎりを積んだ救援隊が昼に都島を出発し神戸へ向かうという。テレビ局が取材の為にそちらへ向かうのでよろしくとの事。但し、交通渋滞でそちらへ何時に着くかわからないとか。

テレビ報道では死者が増え続け、火災は治らず一方魚崎ではガスもれもあって住民の避難を呼びかけて居る由。本日の救急患者は約200人、昨日の様な重傷者は少なく死者も減ったが野戦病院には変わらない。そして2日目の夜になっても北側の空は火災で明々として不安をつのらせる。夜10時過ぎバイク第一便がポリタンクに水を積んで到着。それから2時間後12時過ぎに第二陣の本部から救援物資を積んだ車が到着、水、おにぎりを有難く戴く。

TBSテレビ局の人が同乗して来て撮影の後、翌日以降の取材打合せをする。

1月19日（木）

震災後3日目、テレビでは死者の数が3千人を超えたとの報道。新たに三宮の辺りが燃え始めた。長田、兵庫、三宮、東灘と火災が発生しているが病院のある兵庫区南部は比較的静かであるが陸の孤島となっている。

朝の7時から食糧の配布をテレビ局が取材。

一方、避難者の方々を公共機関である近くの学校へ移って戴こうかと考えたが、先方は受け入れると云うものの暖房があるなし等当院のほうで環境が良く、たとえロビーの地面へ寝るとしてもカーペットのある当院のほうでまし。まして寒さのなか、風邪をひいている方等に移したら病状が悪化する恐れもあり、これも不可能。

本日より病院に居るメンバーで一般外来診察も受け付けることとしたが、エスカレーターは動かず内科、外科、小児科、整形外科、産婦人科等を一階の各診察室を仮の診療所として、診療を開始する。その為、避難されていた方々に診療に差し支えない場所へ移動して戴く。病院の職員も来れる人から順次歩いてでも出勤するようになり、スタッフが増える。併し、風邪の患者が増え始め、一般診療を開始した為、薬局の機能が対応できず、一部の医師が薬局で薬の袋入れをして下さり、病院の全職員がお互いにカバーし合って機能の維持に努めている。

県や市などの救援活動も漸く緒につき本日夕方には弁当300食が届けられた。

夕方、16：00より急遽片付けられた管理棟4Fで運営委員会を開催、緊急時の種々の対応や職員の安否、被害状況の把握などの情報交換。水、ガスのストップによる影響で特に水不足は病院機能に影響が大きい為、各方面に供給依頼しているが、飲水は別として生活用水は供給できない。

その中で和歌山から10tローリーが水を積んで12時間かけて来てくれたので病院のタンクに受け入れる。それでも1日200t使用の病院には焼け石に水の程度である。夜に入って避難所からインフルエンザの患者が続々と見える。医療機関は休む暇もない。

TBSのテレビ局の方々は帰る気配もない。病院の活躍振りを撮影している。

街の火災は下火になり、余震の回数も徐々に減少している。夜12時近く本部からの支援物資の牛乳、パンが届く。

本日、外来患者359名、入院9名、死亡2名。

1月20日（金）災害後4日目。

朝6時過ぎ、産科で入院した右近祐子さんに女子誕生。毎日暗いニュースばかりの所へ明るいニュースという事で産経新聞が取材に来る。又その話を聞いて常駐していたTBSのスタッフが撮影してテレビニュースに流す。

県や市の公共機関も少しづつ救援活動に動きだし、本日は弁当が600食来る。又、水も市議の長嶋さんの口添えで第一突堤の給水船へ取りにきてくれたら水を渡すとの回答を得たが肝心のタンクローリーの手配が思う様に行かず水不足は解決しなかった。

街は少しずつ落ち着きを取り戻し、火災は1部に残っている他は鎮火した。但し交通機関は道の不通や規制等で動くところは少なく車、電車共駄目で船での交通を検討しているらしい。

夕方サンケイ新聞の第一面に右近祐子さんの写真が大きく出た為、翌日から各テレビ局に追い回されることになる。明日から（土）（日）と本来ならば連休に入るが救急患者の来院が予想される為、夕方事務部の打合せ会で当番をきめて、休日の患者の対応をすることにした。病院関係者は今日で4日間殆ど泊り込みで不眠不休の為、疲れがたまっているので、休日には1部休める人は休んでもらうようにした。病院スタッフにも風邪がはやり始めている。

本日の外来患者448名、入院10名、死亡なし。

1月21日（土）震災5日目。

本来であれば外来の休診日であるのに救急患者が来ると予想して、準備体制をしていたところ、朝から来院患者ひきも切らず、とても対応し切れない。事務所の人も総出で患者対応に当り、漸く診療をさばいてゆく。来院者は150名に上りとても救急対応のレベルではない。

朝からテレビ朝日、フジテレビ、NHK、TBSテレビなど各マスコミより取材の申し込み相つぎ午前中テレビ朝日の島さん所さんのチームが右近さんに会う。フジテレビは翌日に又TBSも昨日取材したにも拘らず他の取材班が取材を申し込んでくる。患者さんの体調など眼中にないみたい。

午後、鐘紡本部より石坂常務が見える。現地の状況を視察されたうえ、かねてから入院中の伊達氏と共に都島へ帰られる。帰りの車はこちらを夕方5時に出て都島へは朝方の3時頃に着かれたと聞く。

夜22時よりTBSテレビブロードキャスターで「鐘紡記念病院を救え」という番組を13分放映。その中で病院の水不足を訴えた所、番組終了直後から水供給の電話が相つぐ。

夜12時本部より、救援物資のパンが又12時半に高槻から水を積んだタンクローリー車が到着する。

1月22日（日）震災6日目。

雨の日曜日、西岡本では崖崩れの為、避難命令が出ている。

石原社長が視察のため、本部から車で見える。朝早く都島をお出になったので、朝の8時半には病院に着かれた。タンク車よりの給水状況など見られて院内の人々を激励して帰られる。

昨日から引き続き各テレビ局は右近さんを追いかける。

午後、今後の給食のために、今まで特に患者食もなく食べられたらいいという緊急体制から患者用のおかゆ等を自ら作る為、プロパンガスの手配をしてほしいとの要望があり、本部の救援センターへプロパンガスボンベ20本を依頼する。

夕方、兵庫県の救援物資センターより毛布等が送られてくる。

本日の外来患者57名、入院8名、死亡1名。

1月23日（月）震災7日目。

早朝4時半山口県防府よりプロパンガスボンベが到着。早速賄所へ。道々夜であったが神戸の破壊状況に圧倒されたと云う。

本日より3階迄のエスカレーターを動かし夫々の診療場所を正規の場所に移す。

テレビアサヒ、フジテレビ共8時30分より右近さんのニュースを放映、9時に県消防学校より自衛隊の車が徳島県等から来た救援物資を1杯積んで持ってきてくれたので先ず1階ロビーに入れる。

又、広島大学より神戸への救援物資として医療資材を用意するので欲しいものを要望されたいとの申し出があり、院長先生より回答する。

又、通勤が殆ど不可能な為、殆どの人が泊り込んでいる為、男子は管理棟5階の講義室を女子は寄宿舍を夫々臨時の宿舎として使う事としゴザとフトン80組を本部に依頼した。

又、神戸大小児科より神大の附属病院10Fの小児科病棟が倒壊した為、小児科医1名を派遣したいとの申し出があった。

夜の10時30分、広島より救援物資が届く。

夜の11時30分には保健所から水をタンク車4台につんで持ってくる。

本日の外来患者619名、入院14名、死亡なし。

1月24日（火）丁度震災後1週間目。

院内の避難者は日々減少し、本日調査したところ一時の1/4の51名になっている。

都島本部から人的及び物的被害の調査依頼あり、人的被害は従業員本人にはないものの家族をなくされた方が5名又物的被害は病院では約2千万程度だが、家の被害を受けた人は少なくとも60名、寄宿舍は調査中と回答する。住民が居られなくなった為の患者減はちょっと予想できない。

午後朝日テレビより明朝上羽院長へ電話取材の申し込みあり、直接テレビ放映するとの事である。

又職員の風呂がない為、入浴希望者は多く、病院のバスを使って北区の浴場迄往復する企画をしたが夕方5時に病院を出たバスは8時をすぎても三宮迄しか行けず、結局は何も出来ずに9時に戻ってきた。

本日外来患者570名、入院6名、死亡1名。

1月25日（水）

朝7時40分から約10分テレビアサヒで上羽院長談を放映。

11時には、市衛生局より氷106箱来る。

15時、アサヒ放送道上洋三さんより電話があり、今回の被災に際し対応が早かったと聞くが何か危機管理のマニュアルがあったのかとの問いがあり、それはなかったが職員が一致協力して危機に対応したと回答。おはよう道上洋三ですで明後日放送したいとの申し出があった。

夕方比較的大きな余震があった。

本日外来患者466名、入院11名、死亡0。

1月26日（木）

大分正常化して来たので避難者への朝食の配布は本朝をもって打切ることとした。

本年4月よりスタートする予定の漢方外来の充実につき富山医科薬科大学の寺沢教授よりかかる非常時ゆえ医師の派遣を遅らせようかとの申し出があったが、多くの患者さん方が漢方の充実を待っておられるので、是非予定通り派遣して欲しいと回答する。

又、各所より水の供給が相つぎ水タンクも可なり一杯になった。

夕方、臨時部門長会議を開催。

院長より今回の災害時の各人の対応に感謝すると同時に自主性を尊重、各人の希望は申し出て欲しいと話す。

本日の外来患者460名、入院8名、死亡1名。

1月27日（金）

本日朝より各階に給水開始。災害後10日目である。これでガスを除き復旧したことになる。

朝7時45分よりおはよう道上洋三ですの中で院長談を放送する。

午後1時、伊藤名誉会長、病院の状況視察の為、来院、お見舞品を戴く。

又生産研よりコンピューターの破損状況を調査にくる。

種々のところが大分平常化して来ている。

本日の外来患者458名、入院8名、死亡0。

1月28日（土）

県消防学校より自転車が救援物資として届く。出来るだけ自立心を持つ為、救援を断り自ら必要なものを手当てするように心がける。

長い救急対応の為、職員の疲労が大きいのので、明日は出来る限り休養する様要請した。

本日の外来患者256名、入院7名、死亡1名。

震災と戦災

名誉院長 戸山靖一

平成7年1月17日午前5時46分は神戸に住んでいる人にとって、一生忘れることの出来ない時間であると思う。

私は震災の被害の跡を見て、直ぐに思い起こしたのは、昭和20年の神戸空襲の被災地のことである。もう50年、丁度半世紀前のことで、多くの人は知らない過去のことではあるが、この年の神戸は毎日のように空襲警報がなり、夜はいつでも防空壕に入れるようにと、着の身着のままで、一階で寝たものである。丁度、いつ余震がくるかと、不安のうちに、毎夜を過ごされる人々と似た状況で、空襲警報のサイレンが鳴るたびに、防空壕に飛び込んだ。

この空襲には、一トン爆弾による爆撃と焼夷弾による絨毯爆撃とがあり、爆弾では丁度今回の震災で家屋が倒壊したのと同じ状態がみられ、焼夷弾では一面焼け野が原になったのである。この中、神戸の空襲で最も激しかったのは、3月17日と6月5日の大空襲で、3月には夜間に神戸の西半分が焼かれた。そして、6月のときは、忘れもしない午前6時、いったん入った自宅の防空壕から様子を見に出ると、B29が一機ずつ横一列に並んで、まさに焼夷弾を落とそうとする瞬間であった。この時は住吉、御影から神戸の東半分と須磨が、南は今の43号線から北は山手幹線のやや上までの間を、この焼夷弾の雨が降り、今回の長田区の焼け跡と同じ光景がもっと広範囲にみられ、多数の死傷者が出たのである。兵庫区の鐘紡記念病院の南にあった鐘紡兵庫工場は2月4日の川崎、三菱造船所への爆撃で半分が、ついで3月17日の焼夷弾攻撃で完全に焼失し、病院も旧本館は無事であったが、今の西館の三階が焼けた。

もちろん、このような広範な被害に、避難所も、食べる物もなく、火傷の手当てを受けられる場所もなかった。私の父の病院にも負傷者が運び込まれたが、応急手当をするしか仕方がなかったことを覚えている。

私はなにもこの時と今回とを比較するつもりはない。ただ、あの惨憺たる焼け跡から神戸市の人々は立ち上がって、先日までのあの神戸を造り上げたことを思うと、今回の震災にも負けずに、まもなく神戸も復興することを願うものである。

地震とわたし

内科 山本弘之助

1月16日冬休みを終わった長女が鳥取に帰り、少し、寂しくもホッとしつつ、前日収録した神戸製鋼対大東大のビデオを楽しんだ。相手が弱かったためもあるだろうがボールの動きに合わせてバックスのフォーメーションが自在に変化するのには今更ながら感心した。

ラグビーで個人の名前を上げるのはタブーであるが1983年同志社のキャプテンとして当時の新日鉄と対戦した頃の平尾をビデオで較べてみるとその体格、動き、風格等に格段の違いがみられて面白い。

16日は何故か就寝が少し遅くなり、0時30分頃眠りについた。

翌17日朝ぐっすり眠っていた私は何となく体がギコギコするのを感じ学生時代に乘ったブルートレインが一瞬脳裏を横切ったが廊下を隔てて休んでいる家内が「お父さん、お父さん」と悲痛な声を上げているのを聞き、初めて非常事態の発生を知った。もっとも「トイレにいる」と返事したらしいので未だ寝呆けていたらしい。慌てて枕許の懐中電灯を探す为本に埋もれて何が何だか解らない。起きようと試みるが体が動かない。何か布団の上に重いものがのっかっているらしい。「ヨイショ」と渾身の力を振り絞って先ず腰を丸くし次いで上半身を起こした。回りでゴロゴロという何か落ちていく音と共に急に身軽になった。私は六畳の書斎に独りで寝ており布団の左右、足のほうに作りつけの本棚が、右側に机が、枕元の小机にワープロとテレビが置いてあり、その真中で布団を頭からかぶって寝るのを常としていた。取り敢えず隣室に閉じ込められている家内と次男の安否を確かめる為、書斎の扉を開けようとしたが本らしきものが50cmばかり積もっており、それを排除して隣室の扉を開ける。隣室も本棚が扉に倒れ掛かって内からは開けられないが、外からは意外に簡単に開いた。

次男の寝ていた所に筆筒が倒れている。とっさに家内が次男を抱き寄せたらしく怪我がなくて済んだ。二人を部屋から出して戻り、枕元のラジオと眼鏡を手探りで探すが見当たらない。止むなく一階に下り既に起きていた義母が無事である事を確認した頃には少し明るくなって来ていたように思う。

リビングは一面食器の破片で足の踏み場もない。家内がほうきで掃除をしている間、慌てて長男と長女に電話をかけるがつかない。

次男がラジオをつけ明石海峡付近を震源とする地震であった事を知る。その頃名古屋の姉が見舞いの電話をくれたので怪我のないことを伝え、名古屋から長男、長女の安否を確かめてくれるよう依頼、まもなく両名共無事であることが解りホッとする。再度2階に上がり眼鏡を探す。ごみの山となった書籍を排除すること1時間、漸く見付かり細かい所が見えてくるにつれ本の落ち方が尋常でなく通常の反対方向にとぶ様に落ちているのに気付く。ワープロも部屋の真中までとんでいる。机の脚が2本折れ、上の厚いガラスが落ちて布団にのっている。間もなく電気がつく。

長女の部屋をみると万有百科辞典を入れていた重い本棚がベッドの上にまともに倒れている。彼女の運の強さを思った。

この頃、漸く少し冷静になると同時に、にわかに病院のことが心配になってくるが未だ外傷患者が殺到していることにまで頭が回らなかった。9時前に車で病院に向かう。高速道路は閉鎖されているが10時半頃到着、既に、当直の先生やいち早く駆け付けた先生方が1階のフロアーで救急処置をしておられる。一段落したと見えて仕事らしい仕事はないが空白の状態では何かしていたと思うが記憶にない。ただ勤務していた方が皆冷静で、そのため入院患者が意外に落ち着いていたことが印象にのこる。少し落ち着いたところで取り敢えず病院の今夜の態勢について事務長、看護部長と相談する。午後4時過ぎ、松浦先生がみえたので後ことをお願いして帰宅。

6時から3時間並んで給水車からバケツ2杯の水をもらい当日の仕事が終わる。山を削り海を埋め開発を急ぎすぎた神戸市が自然から厳しい警告を受けたような気がする。寒い夜、給水所で3時間並びながら、学生時代5月の連休に独りで北海道の知床羅臼岳に登り猛烈な吹雪に遭い、夢中で穴を掘2時間うずくまっていた時のことを思い出す。翌日のテレビであったか、フィリピン大統領や韓国、中国等アジア諸国からの救援の意思表示をきいた時、思わず胸

にこみあげるものがあった。

また親しくしていた人の死に接し生と死が極めて近いところにあり、ふとした偶然や人知の及ばない何か大きなものに支配されているのではないかという思いにかられた。かつて経験したことのない規模の震災である。今後の教訓としてならいざ知らず、対応の遅れ云々等批判してみても仕方がない。被災した阪神地区を後世に誇りうる強固でかつ美しい街に再構築するのが生き残った我々の責務であろう。

(c)1995鐘紡記念病院(デジタル化：神戸大学附属図書館)

大地震と内視鏡室

内科 三崎文夫

当院の内視鏡検査室と内視鏡検査が平成7年1月17日未明の大地震で受けた被害、影響は以下のようでした。

1 内視鏡室の被害状況

今回の大地震では家具などの置いてある位置によって被害の状況が大きく違っていると言われているので、棚、机などがどの方向を向いていたかを考えながら述べてみました。

a 内視鏡室（3階）

地震後はじめて内視鏡室に入ったのは17日の午前9時過ぎでした。入口には破損はなかったものの、入口と手前の廊下との継ぎ目に段差ができ、それにつながる機械室の壁が落ち、亀裂ができていました。内視鏡室のカウンターは引き出しが開いて、ノートなどが散乱していましたが、コンピューターのモニターは落下することなく、患者カードも引き出しから飛散せずに無傷だったのは幸運だったと思います。

入口を開けると内視鏡のカルテが足の踏み場もないほどに散らばっていました。大きな金属製のカルテ棚が3つ壁を背にして西を向いて並んでいるのですが、転倒せずに、6、7センチ南にある検査室の方へ移動して、検査室入口のドアチェックに当って、凹んで止まっていました。ドアの開閉には差し支えがないのでそのままにしていますが、非常に大きな力が南北方向に働いたことをうかがわせます。検査室の中のもう一つのカルテ棚は南の窓を背にして置いてありましたが、倒れて検査台と点滴台にぶつかっていました。上下2段になっている薬品棚は南を向いていますが、上の部分が倒れて引き出しが飛び出て、薬品が散乱し、一部は破損していました。また、その隣に並べて置いてある機器収納庫はガラス戸ですが、開いて中のものが飛び出してはいましたが、ガラスは破損を免れました。ただ収納庫の上にのっていたコンパクトディスクとプレーヤーは落ちましたが、故障や破損はなく、そのまま使っています。検査室のなかで一番高価な内視鏡本体と電源はキャスターのついた台に乗っていたので、動いて検査台に当たったようですが、無傷でした。そのほかの書き机（南向き）や内視鏡洗浄器（西向き）、冷蔵庫（西向き）には異常ありませんでした。ただ、机の上の内視鏡フィルムビューアー（北向き）は床に落ちて、破損してしまいました。西隣の検査室でも検査器具には異常なく、レーザー装置や机（いずれも南向き）、また洗浄器やガラス戸のついたカメラの格納庫（いずれも東向き）も無事でした。奥の収納室では軽いもの、例えば注射器、空の内視鏡ケースや紙製品などが崩れたり、棚から落ちたりしていましたが大きな被害はありません。内視鏡室全体の西北にある患者指導室にはワードプロセッサやコンピューター（東向き）がありましたが、いずれも無傷でした。また、南北に向かい合っている2つの書庫にも転倒や破損はありません。患者待合室では出入り口の上の壁に亀裂がみられました。そのほか、前処置室、トイレはどれも狭いためか被害はありませんでした。

b 消化器センター（西2階）

消化器センターは待合室と3つの検査室からなっていますが、被害は待合室に集中していました。待合室にある移動式の間仕切りは転倒して、ガラスが破損して床に散らばっていました。しかし、テレビ受信器は大きく移動していたものの、壊れてはいませんでした。ただ、テレビを乗せている台の扉がはずれて、飛んでいました。そのほか待合室にある机と多くの受診者用の椅子には破損は認めていません。待合室の隣の検査室の薬品棚は転倒して、薬品が散乱し、引き出しが飛び出して変形して元に戻らなくなっていました。

そのほかの検査室も含めて検査台、内視鏡機器、内視鏡収納庫、洗浄器には被害がありませんでした。

2. 地震後の内視鏡検査

a 新谷教授の検診

今年の新谷教授による内視鏡検査は1月12、13、19、26、27日の5日が予定されていました。12と13の両日は終了したのですが、地震で鉄道が不通になり、また検査自体が出来なくなって、以後の予定は中止になりました。

b 通常の内視鏡検査

今回の大地震では内視鏡機器の被害はほとんどなく、検査はいつでも再開出来る状況にありました。しかし、内

視鏡機器は使用後の洗浄に大量の流水を必要とします。それで、地震直後からの断水という状況では通常の検査は出来なくなりました。しかし、地震によるショックから消化管出血を起こした患者が運ばれてくることも考えて、いつでも検査のできる体制はとっていました。幸い地震後数日間は緊急内視鏡検査の症例はありませんでした。1月23日になって、水道は復旧していないが、給水車などで病院内の水の状況が好転してきたため、内視鏡室への給水は時間を限って可能になったとの連絡があり、内視鏡検査を午前中に限って、1台の内視鏡を使って再開することにしました。そして翌24日には10日ぶりに2例の上部消化管内視鏡検査が行われました。下部消化管内視鏡検査や食道静脈瘤紮術など特殊な検査が行われたのは1月31日になってからでした。

現在では大地震から1カ月あまりになりますが、その間の内視鏡検査では消化管出血や食道静脈瘤からの出血の頻度が高いように思えました。これは震災による非難所での生活や水道、ガスのない生活、あるいは水運びなど慣れない生活がストレスとなって出血を引き起こすと考えられています。折もおり神戸大学老年医学教室の千葉教授より大地震の後、消化管出血で緊急内視鏡にまわる症例が多いようなので、地震と出血さらに最近話題のヘリコクター・ピロリと出血の関連を含めてまとめてみたいので、鐘紡記念病院も協力して欲しいとの要請がありました。私どもも興味があり、島田医長を中心になって症例を検索し、7例を報告いたしました。この研究については2月26日の朝日新聞（朝刊）一面に報道されたので、ご存じの方も多いと思いますが、記事の一部を載せておきます。

重い、胃腸障害 被災者に増加

震災ショック・避難ストレス

高齢者目立つ 吐血し死亡も

阪神大震災（兵庫県南部地震）で、避難生活を送る被災者に、精神的ストレスが原因の胃かいような、重度の胃腸障害の患者が増えている。避難所で突然血を吐いて救急車で運ばれる例が多く、死者もいる。自宅倒壊や避難所の不自由な生活がストレスになっていると専門家は見ている。ベトナム戦争の帰還兵でも同様のストレス性の胃腸障害が問題になったといひ、震災のストレスの強さを示すものだ。高齢者に患者が目立ち、神戸大医学部の老年医学講座（千葉教授）は、十数カ所の主要病院の協力で実態調査を始めた。

神戸大病院に一月三十一日、救急車で六十四歳の男性が運ばれてきたが、問もなく死した。神戸市長田区の避難所で倒れて血を吐き、胃に横三、縦三のかいようがあった。「胃かいようの出血によるショック死とみられる」と同病院救急部は話す。

男性は長田区内のアパートで一人暮らしだったが、アパートが倒壊し避難所に移っていた。妹は「昨年暮れに会ったときは元気だったし、胃の病気もなかったはずなのに」と話す。

同市東区の川崎病院でも、胃や十二指腸のかいようや急性の胃腸炎で六人が入院した。全員八十歳以上で、四人が七十五歳以上だ。市原紀久雄副院長は「血を吐くような、かいようの患者は、通常は一カ月に一人といひ。被災時のショックや、寒くてフリースイも保てない避難所の生活などのストレスが影響したと考えられる」と話す。

入院中の塩津拓次郎さん（八十八）は、全壊したアパートで五時間も生き埋めになつて救出され、近くの中学校の避難所に移ったが、十日夜、吐血性胃かいようで倒れた。貧血状態で衰弱しており、点滴と、内視鏡で胃かいようの出血を止める治療を受けた。

塩津さんは「避難所の環境は寒く、食事もしないにきりばかり。炊き出しがあっても、体が動かないに行けなかった。こうしたことがこたえた」と話す。

大阪地区診療所と震災

内科 井上善英

地震直後の大阪地区の状態についてはよくわかりません。やっと大阪の診療所に行くことができたのは地震があつて1週間目でした。緊急体制で病院がおおわらわだったのと、交通機関がずたずたになっていたのもとてもその余裕はありませんでした。テレビの「ブロードキャスター」に報告された都島本部はあまり被害が大きくなさそうだったので内心は、ほっとしていました。ただ、電話連絡で、けが人の処置に忙しいらしいということと、避難者の対応に事務所は大変だということは知っていました。いつまでも診療所をそのままにしておく訳にもいかないので1月25日、タクシー、バス、電車と乗り継いで3時間半かかって大阪に着きました。途中の惨状に打ちのめされてしまっていた私の眼前に、普段とまったく変わらない大阪がありました。人々はネクタイ、スーツとコート姿ですし、繁華街やパチンコ屋はいつも通りの喧噪でにぎわっていました。ただ、人通りはややまばらで、いつもより静かなと思った程度です。駅前第2ビルの診療所は15階にあります。中は、もういつもと変わりありません。後田看護婦さんが驚いた様子で出迎えてくれました。地震による揺れは相当ひどかったそうで、すべての備品がひっくり返っていたらしいのです。建物には被害がなかったけれども15、16階はどことも同じで復旧するのに大変だったと聞きました。当日、出勤できた人は約3割でした。翌日、診療所には切傷、打撲傷などの軽症者が多く治療に来たとのことでした。西野婦長さんから、都島ではほとんど異常はなかったと聞きました。研究室の実験設備も何ともなかったらしいのです。診療所ではやはり、軽度の外傷が多かったそうです。何よりも大変だったのが、被災した社員の救援活動をした大阪事務所でした。不眠不休で避難場所をさがし、手配し、収容したのです。以下に同事務所がまとめた報告書の一部を拾ってみます。被災地区居住者約820名。一時避難者数約800名、被災者総数450名、家屋の全半壊約250戸。死亡者...従業員1名、従業員家族13名、元役員1名、OB2名。被災者受入れ状況... (1) 世帯主総受入人数38世帯 (137名) (2) 単身、独身者総受入人数118名。

初期救援活動：鐘紡記念病院対策 (1) 食事補給 (1/17-1/30) おにぎり500-1000ヶ/日など。 (2) 飲料水等補給 (1/17-1/27) 当初ポリ容器、後タンクローリー手配。 (3) そのほか食器、台車など30品目。プロパンガス手配。甲南寮対策 (食事、飲料水、そのほか)。被災者対応...避難者受入れ・葬儀関係・倒壊家屋発掘作業・家屋損壊者見舞金支給・特別融資制度・被災相談の実施・義援金など。

被災者の中には、怪我した人やショックのため不眠になった人が少なくありませんでした。地震の後遺症はこれから増えてくると予想されます。病院から大阪はまだ遠いのですが、できるだけ社員の健康管理に力を尽くしたいと思っています。

大自然と人間

内科 田中耕太郎

今回の大地震でわずか数十秒の間に数々の悲劇が生じ、大勢の人々が苦境にたたきこまれた現状を見ると、自然の力の恐ろしさに驚かざるをえない、と同時に人間がいかに無力を痛感する。科学万能のように言われ、人間は今や何でもできるとうぬぼれているが、怒り狂う大自然の前にただ逃げまどうばかりである。科学的手段もほとんど役に立たず自然の怒りがおさまるのをただじっと我慢して待つばかりである。今はっきりわかる事は人間の幸福、満足とは大自然の恵みを受けてこそ存在するという事である。人間一人一人に意志があるように、大自然も超エネルギー体としての四次元的な意志をもっている。この意志を人間は昔から神として崇めてきた。今回の震災で人間は反省しなければいけないであろう。海を埋め、山を切り崩し、木々を切り倒し、その他あらゆる手段で自然を破壊してきた。今回の震災は人間の身勝手さに対する自然の抗議のように思えてならない。今や日本だけでなく地球規模で天変地異が起こりつつある事を忘れてはならない。一層強固な防衛策をとる事は大切な事であり、結構なことである。しかし、それはあくまで災害が起こった事を想定した受身的な手段である。

もっと根本的な人間の心の問題が忘れ去られて残っている。しかし、人間はそれに気がついていない。

生命

内科 島田隆男

あの震災からもうすぐ3ヶ月が過ぎようとしている。今、思い返せば病院医療という仕事にせよ、日常生活にせよ、そして通勤にせよ苦痛を強いられることが多かったが、この間の時間が大変早く過ぎ去って行ったように感じられる。恐らくこれは、当日の地震の、そしてそれに続く余震のあの恐怖が強く頭に残っており、1月17日が、ついこの間のことのように思うからであろうか。

今振り返って考えてみると、この大震災で生命（いのち）の大切さということを本当に痛感させられた。人の生命の大切さ、これは私達病院に勤務する者にとって当然わかりきったことである。しかし、地震と同時に我々は、日常何気なく使っている色々なものを失い、また事欠くようになった。この時本当に物の生命の大切さが分ったように思う。電気が、ガスが、水道が、食糧が、家財が、そして生活用品が...

失ってみて、はじめてこれらの物の大切さが身にしみて分り、また再びそれらを手にして有り難く思う。飽食の時代、物余りの時代であった。どんな物にも生命があり、有効に使われる使命がある。たいていの物はお金をだせば手に入れることができ、それに甘んじて無駄使いをしていたのではないだろうか。物それぞれに生命があり、それに感謝をして使い切る。このようなことを今まで考えたこともなかった。しかし、震災により物の生命、貴重さ、そしてそれへの感謝を教えられたような気がする。

この事はいつまでも忘れずに、心ふかく銘記しておきたいものであるが、簡単な事のようにであり、実は非常に難しい。

震災に学ぶ救急外科医療　－時恰も好し－

外科 楠徳郎

その日私はゴォーという音を聞いたような気がして眼が覚めた。家中が軋みながら揺れ動き次の瞬間家が倒れるのではとの恐怖におびえた。電気スタンド、鏡台が倒れ、一階の方でも物の壊れる音が響いた。家の中は真暗になった。窓外では近くの屋根沿いを走る高圧電線が揺れて触れ合い、あちこちでショートする青白い閃光が眼に入った。停電の中、電話も不通で、同じ情報を繰り返す携帯ラジオを聞きながら夜明けを待った。近所の人々が路面に亀裂が入りガス漏れがひどいので火を使わないようにと伝えて来た。地震の詳しい情報もわからぬまま、ふと自分が医師であったことを思い出した。“病院は大丈夫だろうか？”と。それでも使命感はまだ回復しなかった。朝8時過ぎに神戸市の長田区や兵庫区で火事の発生していることを知った。

病院へ向かうべく車で176号線に出たが、信号の消えた交差点は東西南北共渋滞で全く動けない。一旦家に引き返し酒をした、か飲んで食物、水、着替えを用意し、当分は家に戻れない心積もりで再度出発した。車窓から見る変わり果てた景色は迫力があつた。傾いた家屋や電柱が往路を妨げた。段差のついた地割れの続く武庫川堤の道とその先でJRの踏切りをふさいで止まったまゝの貨車の列。大渋滞で全く車の動かない国道2号線西大嶋交差点。軒並みに一階が押しつぶされ傾いた店々の続く西宮の商店街。半壊の山門横に“17日正午より〇〇家葬儀”とある案内を見た時、通夜の早朝被災された遺族や仏はどうなられたかと人事ながら気になった。宝塚の家を出て既に3時間、未だ西宮市内に閉じ込められたまゝ。西宮戎の通りで交通整理員の制止も無視して43号線に入った。ところが大渋滞の2号線に比し、路面はガタガタながら車は少なかつた。路面の段差で時々車の底をすりながら神戸へ向かった。見事に山側へ横転倒壊した阪神高速道路の架橋群は圧巻であつた。ようやく病院近くに来るとこれまでの景色が嘘のように街並みは静かで病院も外見上以前と変わるところはなかつた。

夜8時過ぎに病院に入ったが外来は被災者や治療を受けた人達とその荷物で一杯。しかし救急治療のピークは過ぎ、私自身まさに雁も鳩も飛んだ後に駆けつけた猟師の体であつた。

外科は森Dr.が東灘の自宅を捨て置いてAM8：30には病院に入り一人孤軍奮闘の長い一日を過ごす結果となり、寺村Dr.も大津より10余時間をかけて夜に到着。かゝる震災時の出勤が如何に困難であるかが現実に証明された。

被災地に在る当院では地震後相次いで外傷患者が来院。緊急診療の忙しさは想像を絶するものがあつた。倒壊家屋の下敷きになり運び込まれた人々、中には既にこと切れた人も多く、又蘇生術を試みても薬石効なく死亡した人、腰背部、腹部や下肢の筋肉や皮下組織が大量に挫滅されたり或いは下敷きで疎血状態が続く急性腎不全を併発するcrush syndrome（圧挫症候群）を呈した人や外傷性ショックを呈する人達が含まれていた。Crush syndromeの3名は入院加療を行ったが1人は死亡。他は救命された。全身各所の挫滅創、挫創、切創などで創のデブリドメント、縫合処置を受けた人達は数知れない。処置に要する機具、器材は底をつき、平常では考えられない不潔な状況下で治療が行われた。中材の機能麻痺でかゝる状況は数日続いたが不思議なことに創感染は殆ど起きずにすんだ。

今回の震災に伴う緊急診療は普段のそれとは異なり病院もそして我々スタッフも被災下に在るところに若干の危惧すべき問題が残った。幸い外科では緊急手術を要するような胸腹部の内臓損傷の症例、出血性ショックや広範熱傷など重篤な症例が運び込まれなかつたので、急場をしのぐことができたが、果たして緊急手術を震災当日に行えたであろうか。

電話の不通、道路状態の悪化でスタッフを集めることも、又、輸血用血液の確保も困難であつたろうし、備品、機材の散乱した手術場で清潔を要求される手術の準備は現実不可能である。さりとて緊急手術を要する患者を震災圏外にある病院へ搬送することも至難であつたろうと思われる。当然のことながら震災直後より人名救助を第一儀とした活動を指示した行政の姿勢を見ても、私達がかゝるリスクをかゝえながらも成し得る可能な限りの医療に奔走した事実は評価こそされ責められるものでは決してないと思われる。しかし私達は今回の経験を糧として、常により高度な可能性を維持できる診療体系の確立をこれを機に模索すべきであろう。“大難これ如何にか回避せん”の問いに“恰も好し”とたゞ一言答えられた唐末期の趙州和尚の語を今思い出している。そして地震直後のあの混乱の

なかで活躍された職員の皆さんの努力と誠意に心より敬意を表したい。

(c)1995鐘紡記念病院(デジタル化：神戸大学附属図書館)

地震の日の長い通勤

外科 寺村康史

前日は振り替え休日だったため、地震は比叡山麓の自宅での体験となった。震度5、神戸地区の震度7とは比較にならないものの、経験したことのない揺れだった。テレビをつけると震源地は淡路島とのこと、いつもならば6時半頃に自宅を出るのだが、何とはなく行けそうにない予感がする。車はやめてJRにしようと考えたが、その後の情報ではそれも無理な様子。淡路島で死者が出たとか、阪神高速の一部の橋脚が横倒しになったとか刻々と被害状況が伝えられる割に神戸の中心部のことが全くわからない。病院にも連絡がとれない。8時を過ぎても状況は変わらず、地道をゆっくり神戸まで行こうと決めた。後になって後悔するのだが、地図も食料も持たず、いつもと同じように家を出てしまった。

神戸に赴任して1年半、通常の名神、阪神高速のルート以外には、渋滞したときに走る国道171号線しか知らない。まずは京都市内を抜け、その171号線を西に向かった。京都はいつもとなんら変わらない。これなら夕方までには着けるだろうと高をくくっていた。茨木あたりで流れが急にストップ、だらだらとしか進まない。そのうちに石橋で通行止めとの表示があった。迂回路を知っていればそのまま走ったであろうが、通れないなら2号線しかない。423号線を南下した。この道ははじめは異常なほどに車が少ない。ところがである、大阪市内に入ると大渋滞。2号線の表示方向におれることもできず脇道を走り回ることになる。やっとの思いで2号線に合流できたが、ひとつの交差点を通過するのにすら何度も信号待ちをしなければならない。そのころにはラジオで状況がかなり分かっていたが、通り沿いのショールームのガラスが割れたり屋根瓦が落ちたりで、被害が実際に眼に見えてきた。淀川大橋を渡るのには2時間程かかったように思う。道路が広い2車線になると一般車両はその両側に寄せられ、そのあいだを縫うように名古屋をはじめ他府県ナンバーの緊急車両が次々と追い抜いていった。しばらくはそれでも我慢して渋滞の中にいたが、日も暮れてきて気も短くなったのかじっとしていられなくなり、43号線、臨港線、また43号線と次々にルートを変えていった。南北の道は比較的走れるため錯覚に陥るのであるが、1時間かかっても実際に東西方向へはほとんど進んでいなかった。途中、西宮の被害は想像を絶するもので、酒造工場の周辺もいたるところで道路が陥没し、迂回せざるを得なかった。家から携帯電話に連絡が入り、引き返すようにすすめられたが、今更その気にもなれない。5時頃ようやく病院に電話がつながり、茂見婦長に様子を聞くことができた。病院はあまり被害を受けていないとの話に少しは安心し、さらに神戸をめざすことにしたが、この時点ではいつになるやら想像もつかなかった。

西宮から芦屋を越え灘区あたりまで、今ではどの道を通ったのかよく思い出せない。ただ、“登りの方角が北”ということだけを頼りに西を目指した。数箇所は道路標識などで記憶に残っている地点がある。北の方六甲山のあたりから西に行けばよいのではと2号線の神楽町交差点を北上し、大沢西宮線を六甲山方面へ向かってみたがどの道も通行止め、有料道路の料金所のところでは家を出て以来はじめて車を降りた。そこからは街の夜景が見られた。ネオンはなかったが、家々の明かりが灯っているのにほっとしたものだ。再び引き返すことになったが、少しでも西に向かおうと道をそれたのが間違い、苦楽園のあたりでは倒壊した町並みの中に入りこんでしまい右往左往。それからは2号線と43号線の間を入ったり来たり、岩屋の交差点では落下した阪神高速の脇を怖々通り過ぎもした。灘区内の2号線で本線が陥没し、1台ずつ歩道をはしらなければならない所を通過してからは今までの渋滞が嘘のようにスムーズに走ることができた。ところがあたりは信号も含めて停電のため異様に暗い。道路の段差が直前にならないと分からないためにブレーキが遅れ、車の底を何度となく打ちつけた。ゆっくり走ればよいものを気ばかり焦り、後にこのことが原因で車のマフラーとオイル漏れを修理することになった。

三宮のビルが軒並み傾いたり倒壊しているのを見たときにはさすがに背筋が寒くなった。と同時にそれまでは心配してもいなかったが、兵庫にあるマンションのことが気になりだした。下山手通りを湊川まで来ると通行止めになっており、北西の空が不気味に赤く光っていた。

マンションにたどり着いたのは9時30分。周囲の木造家屋は何軒もが全壊の状態であったが、外見上建物には異常

はなく電気もついていた。かなりの数の人が1階ロビーに避難してきていた。エレベーターは停止していたので歩いて6階まで上がったが、内部の壁にはいたるところにひびが入りコンクリートの破片が落下していた。自室のドアは開きにくく、中を見てびっくり、玄関からして足の踏み場もない。元々身の回りのものはわずかしかないうえであつたが、すべてのものが落ちてくると意外と多く感じる。とりあえず部屋まで入れる程度のかたづけを済ませ病院に行った。10時を過ぎていたが、10人以上の先生たちが医局におられた。すでに救急患者の処置はほとんど終わったとのことであつたが、本館1階の状況から、それまでの慌ただしさが一目瞭然であつた。

自宅を出てから約13時間、途中時間のことはほとんど気にならなかつたが、医局のソファでしばらく休んでいるあいだじょう身体にエンジンの振動が残っていた。余震のせいもあつたのでしょうか。

地震の日の異常な通勤をとおして学んだ教訓は、“急がばならべ”である。変に小細工をして迂回路を探すのは愚の骨頂。171号線からそのまま中央突破をしていれば数時間は早く病院にも到着でき、診療の役にも立てたのではないかと思う。

2月11日、上空から見た神戸の惨状

外科 井上貴至

自衛隊にヘリコプターを要請し、入院患者の川野亘さん（58才）を病院南の神戸市立中央球技場から鹿児島県へ転送。

中央球技場を小型ヘリで午前9時に出発し、徳島で大型ヘリに乗り換え、鹿児島へと向かった。搭乗する緊急用のエアバックを背負わされ（最初はパラシュートかと思った）、殺風景ななか工事現場のような振動と爆音で会話のひとつもできず、特に大型ヘリはほとんど雲の上を飛行し、時折エアポケットに落ち、決して快適な代物ではなかった。鹿児島に着き患者さんを見送った後、同じルートで帰路についた。大型ヘリの機内はジャケットを着ていても寒かったが、午後4時半神戸に到着。この間、上空からの淡路、神戸はブルーシートにおおわれた家々が一面に広がり、また集中的に焼け野原となった街がパノラマのごとく見渡され、改めて今回の地震の悲惨さを見た気がした。

平成7年1月17日という日

看護部長 徳山琴子

その時、私はすでに起きていて、身支度にとりかかっていた。5時46分早朝の大地震である。ゴーという音と、なんとも形容の仕様のない異様複雑な音のみが耳の底に残っている。絶望の思い出、必死に机にかじりついた長い長い20秒であった。

停電で真っ暗になった家の中を、ふるえる足でスリッパを探して玄関の扉を全開する。真っ白になった頭の中でも、とっさの判断でそういう行動をしたのは、日頃少しの地震でも逃げ道の確保とばかりすぐに玄関に走る癖があるので、条件反射が働いたのだろう。ベランダからは、ひかり輝く明の明星が、鮮明な形で目に飛び込んできたのが強く印象に残る。

間もなく近くから火の手があがったのがビル等の建物越しにみえてくる。火勢が強く、まだ明けやらぬ空に火の粉が舞っている。火の手はどんどん隣え隣えと燃え移っていくのがみえる。消防車がこない、恐ろしさに暫くは茫然自失、大変な自体が起こってきつつあることを実感して身震いがした。

冬季は7時近くにならないと夜明けがこない。明けはなった家は寒い。空が白んでくると、少し落ち着いてきて回りを見渡す。家具や食器や電気の笠や壁時計などが交じり合いながら散乱して惨憺たる有様である。

近所の方々が、みなさん大丈夫ですか？小学校へ避難しましょうと、声を掛け合っているのが聞こえてくる。

しかし浮んでくるのは病院のこと、患者さんのこと、深夜勤務の、最小人員2人で病棟を守っているナースのこと。特に旧病棟が破壊しているのではないか、などなどがいちどに頭の中をよぎってくる。こうはしておれない。毎日していることなのに、このときの見繕いの手際の悪さ遅さに、自分でいらいらしながら、バックと少々の物を手に病院へむかう。

交通手段がないので歩くほかない。気ははやるが倒壊した家や傾いたビル等に道を阻まれて、迂回しながら、迂回しながら歩く。どの道も亀裂が走り、コンクリートが盛り上がり、まっ直ぐには歩けない。もう自分がどの道を通っているのかさえ、分からなくなってくる。広い通りを選びながらガラスの破片をざくざく踏み、瓦礫の中を越えてゆく。

1階がおしつぶされて2階が道にはみ出したり、3階建ての家の真ん中が膨らんでいたり危険そのもの。夢遊病者のように自宅前に佇んでいる老夫婦の姿がなんとも痛ましくて涙が溢れてくる。

病院の全容が目に入ってくると、鐘紡記念病院は何事もなかったように、すっきりと立っているのが見えた。ホットした。が、一步夜間出入り口に入ると、すでに救急治療の真っ最中で、狭い救急室は一杯である。待機している大勢の患者さんと家族の顔が見える。先生方も看護婦たちも必死で治療にあたっている。

入院患者さんの状況はどうかと気掛かりで病棟を巡回する。幸運にもそれぞれの階の入院患者さんには支障がなかった。しかし、各病棟は物の散乱と、患者さんの対応に追われて真剣そのものである。職員全体がそうであるが、看護部職員を取ってみると実に立派であった。震災直後は、病棟からも駆けつけて応援体制に入り、処置の介助、被災者の介護、衛生材料の調達にと走り回っている。その翌日も時間を忘れて看護に没頭していた。これは誰が命令したのでもない自発的な行動だった。

今、なにをすべきか。それぞれが自分で判断し責任を取った行動をしている。看護婦も、準看護学校に通う学生も看護助手も、そのうえ休みを返上し、夜勤明けを延長して、看護にあたってくれている看護婦も必死だ。連帯感が生まれた。このときばかりは、危機管理のマニュアルなど必要としない動きを見せているのだ。

1階外来のロビーは、野戦病院さながらの様相を示している。でも職員みんなが明るく元気だったのが唯一の支えであった。こういう危機を迎え・不安状態の時にうける人間の優しさ、その人間性を、つばさに感じとれた。

恐怖と余震におびえていた人々も、日が経つにつれて若干の余裕も見受けられるようになっが、噂が噂を呼んで不安が増幅する。今度の地震でも、さらにひどい余震があるというデマが飛び交っていた。しかし、大勢の大切な身体をお預りしている医療人は、しっかりと自己を見詰めて、自分を信頼して行動することが必要であると思う。

特に不安感の強い患者さんの看護にあたっては。

入院しておられる患者さんが震災後数日して、言っておられたことが私にとって、とても励まされる思いがした。「震災直後、20台前半と思える看護婦さんが病棟内の患者さんのところを小走りに回りながら、デイルームに避難してください、と誘導し点呼を取っておられた。退院の近い患者さんも一緒になって看護婦さんを助けておられた。看護婦さんが私のベットの側にきて車椅子でいきましょう、寒くないようにとガウンを着せてくださった。その沈着ぶりには、自分の娘を重ね合せて、なんて立派なんだろうと感心しました。看護婦さんだって心の中は動転していることのように」と褒められて、大変恐縮した。そしてわが病院の看護婦は立派よと誇らしい気がした。

まさに当院の心の約束のひとつ・使命感そのものを実践しているのであった。

「ユーカリ・リポート」（メルボルンから見た阪神大地震）

阪神大地震があってから、「あなたの身内や知り合いの方は、大丈夫でしたか？」オーストラリア人から聞かれなかった人は、珍しいでしょう。

地震のニュースは大きく報道されました。事後も数日に渡って取り上げられたのは、その規模と被害が大きかったせいもありますが、スペースのさき方、追報道の頻度や長さからみて、遠いどこかの国で起こったのではない、もっと身近なものとしてとらえられていました。それは経済関係の緊密度によるものと、地震はないと信じられていたオーストラリアでも、2年前、ニューカースルで地震があり、オーストラリア人にとっても、まったく他人事ではなくてきていることもあります。

報道で共通しているのは、日本政府の対応の遅さ、緊急処置の手を即座に打てないことに、驚きあきれ、批判さえしています。1月21日のTHE AGEには、Japan undecided on aidと言う見出しで、日本政府は神戸地震から3日たっても、世界中から即座にさしのべられたさまざまな救援の申し込みに対して、拒否または返事を保留している、という書き出しで記事が書かれています。アメリカは東京郊外の基地から37000枚の毛布を空輸、スイスからは12匹の犬と25人の救援隊が活躍中だが、フランスが申し出た60人の救助隊と犬については、まだ受け入れられていない、と書かれています。

日本は経済大国だから、金を辞退するのはわかるが、一刻を争う人命救助のための救助隊や医師、犬などを、どうして即座に受け入れないのか解らない、ということ。また、テレビでもThe richest nation in the worldという言葉がよく使われて、世界一の経済力とハイテクを誇る国の国民が、なんら行政の援助も受けられず、貧困な後進国の人々同様に路上で途方にくれている姿が映しだされました。この災害で日本政府は、国は金持ちでも国民の生命や人権はあまり尊重されていないようだ、という印象を、はしなくも国外に与えてしまったのではないのでしょうか。

復旧にあたり、その様子や進行具合は、国内だけでなく、海外からもいろいろな意味で注目されているということ、政府は忘れないで欲しいと思います。

それと湾岸戦争の際、中近東で起こっていることを、日本人が即、茶の間で観たように、政治経済を含めて日本で起こっていることが、即、世界中の茶の間でも観られているということ、忘れないで欲しいものです。

地震と私

外来 岩本紀美子

1月17日火曜日早朝、いつもだったら5時50分頃起き上がるのにその日に限って、今日のお弁当のメニューは時間がかかりそうだったので5時30分頃に起き行動開始した。

いつもと同じように台所に行き石油ストーブをつけ、お弁当のこしらえにかかりガスレンジに点火する。まず、1つが出来上がったのでガスを止めテーブルの方に向いた途端、“ドーン”と突き上げるようなものすごい衝撃、そしてものすごい揺れ、何が起きたのか全く分からない。すごい揺れで立っていられず、“ギヤー”と大きな声で叫びその場に座り込んでしまった。蛍光灯は、大きく揺れ電気が消えた。

石油ストーブは、“カッチャン”と音がして切れた。台所の窓はロックしていなかったもので、ガラス戸がひとりでにバタンバタン左右に移動し、開いたり閉まったりしている。全部の電気が消えてしまっているはずなのに、外もまだ夜が明けてないのに、ガラス戸が左右に移動している様子を見た時は、外は明るく夜が明けたように感じた。

このものすごい揺れと音、とっても長い時間に感じた。もうこの世の最後かと思った瞬間、子供は大丈夫だろうか？2段ベッドに寝ている為、ベッドが倒れていないだろうか。下の段に寝ている子供は押しつぶされていないか心配だがこの大きな揺れ、座り込んで動けない。

私が座り込んでいる所のすぐ上は、流し台の上の袋戸棚がある。中には、鍋や土鍋・すり鉢と重い物がたくさん入っていたが、なんと、ここだけは扉が開かなかった。もし、扉が開いていたら私の頭を直撃していた。もし、ガスを点火していたならば、とてもじゃないが消す余裕はなかった。激しい揺れがひとまず納まった。地震の時は、ドアが開かなくなるので、まず出口の確保をと言うのが頭にあっただけで玄関に行こうと、いつもの場所に懐中電灯をと手を伸ばし、手探りで探すとその辺の様子は変わってしまっている。下駄箱や花瓶、オーブントースター、辺りの物はひっくりかえっている。手探りで玄関に行きドアを開くが、1人なんとか出られるのがやっとと言うぐらいしか開かない。よく見ると、上の家の崖が崩れ、でっかい石が我家の玄関を直撃していた。

次は子供。懐中電灯はやはり見つからない。家の中は真っ暗であるが、何か押し入れの中が蛍の光のようにぼんやりとした光が見えた。真っ暗な中、手探りでつまづきながら、食器の破片が足の裏に刺さり痛い思いをしながら押し入れにたどり着いた。なんと、子供が学校で作ったラジオ付きの懐中電灯であった。転げ落ちて何かに当たって電気がついたのだろう。地獄に仏とはこのことだ。でも取り出してみると、接触が悪くついたり消えたりする。私はベッドの足元の棚にも1つあったはずであるが、本や衣装ケース・テレビ等いろいろな物が落ちて来て足の踏み場もないくらい散乱している。

子供は2人共落下物もなく無事であった。早くベットから出て、パジャマの上にコートを引っかけて外に出ようと促すが、下の子供はすぐそれに従うが、上の子供は「パジャマのままではかっこ悪い、こんな頭では外に出られない」と身支度に時間がかかる。その間近所の方々は、次々に出て行かれる。お互い挨拶くらいしかないが、「大丈夫ですか」とかわるがわる声を掛けてくださったり、我家の玄関の前に大きな石が転がっている為、「ドアがもう少し開くようにちょっと動かしてあげよ」と、石を動かして下さった。やっと子供の身支度が出来て外に出てみると、たくさん大きな石垣の石が我家を目掛けて落ちて来ている。我家の物置がシャワーの給湯機に食い込んで通路をふさいである。物置の上に大きな石が乗っているため、とてもじゃないが動かせない。でもなんとか、1人づつしゃがんでくぐり抜けることが出来た。

まず、すぐ隣にある長田高校に避難する。余震は何回も何回もやってくる。夜も明け明るくなり、余震の間隔も長くなって来たので、近くに姉の家があり、木造で古くまた、年老いた母も居るので気になり見に行く。途中、道はデコボコ、瓦が落ちて来たり、家の門や垣根が壊れたり傾いたりしている。姉の家は、一応家の形はそのままあった。全員無事であった。

余震は、何回も何回もやって来る。家の外の寒い所で余震の納まるのを待っていると、あっちこっち散策に出掛

けた近所の人や、夜勤で家を空けていた会社員が、「新長田の方が燃えているよ。とっても大きな火が出ている。」「あっちの方も火の手が上がってるよ。」「あそこで家が壊れ、生き埋めになっているよ。」という話をしてくれた。

ふと、我に帰り、「こんな所にじっとしていたらあかん。私は、仕事に行かなあかん。こんな状態やったら病院は大変や！」と。

子供は子供で、「学校に行かなあかん。一度も休んだ事がないのに欠席になる。」と言い出す。「こんな時に、電車も走っているかどうかわからへん。今日は休んだらええ。今日は、伯母ちゃんたちと一緒に行動しなさい。絶対かってな事したらあかんよ。」と言い聞かせ子供2人は姉に預け、私はパジャマの上にコートを着ただけなので一度着替えに帰る。

家の中は、色々落ちて来たり、ひっくりかえったりで足の踏み場もない。タンスの引き出しも押し入れも思うように開かない。仕方なく散乱している中から拾い集め着て出た。

近所にいる友達が、古い木造の文化住宅に住んでいるので気になり、病院に行く前にちょっと回って無事を確認して行こうと思い、いつもの道に行くが水道管が破裂して水を吹き上げ、道路は陥没している為、ちょっと遠回りになるがのぞいてみた。2階は瓦が落ち、家の中から空が見える。

彼女は1階に住んでいるのでペチャンコにはなっていないので命は大丈夫。ここは、人の気配がないから、すぐ前にある長田高校にでも避難しているのだろうと思い、私は仕事に急いだ。

いつも通る裏道は怖くて通れない。大きな道を選び長田の交差点の所まで降りて来ると、御蔵菅原のあたりはものすごい火事。

煙と炎、熱風を浴びながらまた、状況を横目でちらちら見ながら歩き、道路も倒壊した家屋や鉄柱が倒れかかり安全な所を選びながら病院へと急いだ。病院まで歩くのは初めて。とっても長い道程に感じた。

病院に着くと、まず更衣室に駆け上がったが非常扉が閉まりとっても不気味な感じだった。そっと扉を開いて中に入ると、ロッカーが倒れたり方向を変えたり、物が散乱している。何とか自分のロッカーにたどり着き、白衣とシューズを取り出し外来へと急いだ。

外来の休憩室は水浸し。ロッカーや書棚が倒れ散乱しているが、まず着替えることが先、そうするうちに中村節子さんが来てくださって一緒に更衣する。(AM9:00頃)中央処置室も水浸し。注射薬も相当破損している。ベッドは全部なかった。内科外来の診察用のベッドもなかった。

ふと気がつくと、松本名誉顧問と姪子さんが3階のフロアーの椅子にかけていらっしまった。「家にいても落ちつかなくて、父が病院に行かなあかと申しますので…」と。3階のフロアーには他に人影もなく1階に降りて行く。階段も、エスカレーターも水浸しである。

階段を降りきった所で、中年の女性が「看護婦さん、生理用のナプキンはないでしょうか？、娘が生理中なんです。家に入れないから換えがなくて困ってるんです。」とやって来られた。断わるわけにもいかず、3階に駆け上がり、ロッカーから飛び出し散乱しているのを拾い集め、袋に入れてそっとお母さんに手渡してあげた。

さて、1階に降りると、負傷者が救急処置室のベッドの上、ストレッチャー・車椅子に乗った方でギッシリだった。整形外来では、傷のある人・骨折した人、内科・外科・婦人科の区別なく次から次と先生方は縫合、処置をしてくださっている。ロビーは軽症の方の処置と絶える事なく次から次と負傷者が来られる。「生き埋めになってたんです」と布団にくるまれたり、畳に寄せられ運びこまれて来る。救急車ではなく、隣近所の方々の車である。ありったけのストレッチャーは全部出払って、患者を乗せて移送する物が無い。そこらにあった付添い用のベッドに乗せ耳鼻科外来に受け入れる。何とか挿管でき入院できた人はまだよいが、硬直がきて挿管すら出来ない方もいる。

霊安室は一杯。次は、外科外来・内科外来にと遺体を運ぶが、あっちこっちになる為、学生に中央処置室を片付けさせ、ベッドを集め、遺体を安置する。

縫合針や糸、衛生材料・器械器具類も底をついてくる。入院ベッドももう一杯。医者も看護婦も学生も息つく暇もなく、皆が一生懸命に動き回っている。ほとんどの方々が朝食も取らずに飛び出して来ただろう。昼食も2時か3時頃だったか小児科外来にパンと牛乳があるからと聞き、一段落した時に入って行ったが、牛乳1口がやっとなのであ

た。お腹がすいているはずなのに、のどに通らない。

外来Nsは、大崎・西馬・小林・大野・佐々木・小島（助手）が8時30分頃出勤。岩本・中村節子・竹添が9時頃出勤。大崎Nsは、長田の親元が心配だからと昼過ぎに帰る。竹添Ns・小島助手はPM3時頃帰らしてほしいと。今夜はこの様子では誰か当直しなければ。佐々木・中村Nsはパートなので泊まってもらうわけには行かず、大野Nsは整形外科で、今一番大切なポジション。明日抜けられては困る。そうなると、小林・西馬Nsしかない。

西馬Nsは、そろそろ救急当直に入ってもらおうと思っていたところなので救急の研修がしてなかったので心残りではあるが、小林Nsと一緒に泊まってもらった。

次の日、18日は、1階で外来診察をする。整形外科と耳鼻科外来で内科系、眼科外来で外科系の処置をする。

19日から通常の外来をする事になり、外来の看護婦順番に電話連絡し、出勤できるかどうかと、被害の状況を聞く。でも、避難している人もいるのか、なかなか全員につながらない。また、遠方は、交通の手段がない為来れないとの由。学生や、先生達の協力を得ながら19日から始める。

整形は整形の患者を。耳鼻科で耳鼻科の薬と内科の診察を。小児科は小児科で。眼科で眼科の薬と外科の診察を。泌尿器科は薬のみ。産婦人科は産婦人科で診察を始めたが、内科の薬を取りに来る人が多くて耳鼻科のコンピューターの端末だけではパニックになり医事課の端末を借り乗り切った。今度は、薬剤師の手が足りないと内科の医師が少しの間薬局に入ったり、薬の受け渡し口に学生を派遣したりで何とか急場をしのぐ事が出来た。

20日から学生やドックのNsの協力を得ながら各科で外来を始めた。日に日に出勤して来るNsも増え、リュックを担いで泊まり込みで出てくれたNs、中央区から自転車で通勤してくれたNs、板宿からなかなかバスに乗れない為、歩いて通ってくれたNs、それぞれに使命感を持ってでてきてくれた。本当にうれしかった。

学生も自分の家が被害に合いながらも一生懸命に仕事をしてくれた。

看護婦と一緒に当直・日直をしてくれたり、疲労と慣れない当直で体調を崩したりしながらも一生懸命であった。

家に帰ったら水が出るからと、おにぎりを作って来てくれたり、色々な食糧を「看護婦さん食べてください」と差し入れてくれた。

病棟やドック・OP室のNsの皆さんにも、17日の受け入れから始まって外来当直まで色々助けて頂いた。とてもじゃないが外来Nsだけでは乗り切れなかった。皆さんありがとう！本当に感謝の気持ちで一杯である。

人の善意に触れた三週間

内科外来 佐々木正子

阪神大震災という歴史に残る地震を体験するとは、誰が予想したでしょうか。悪い夢だったらいいのにといい続けた日々でしたが、たくさんの人の善意に触れて感動もしました。

全壊した両親の家から家財を運び出すのに、仕事を休みトラックで駆け付けてくれた友人夫婦。両親を案じて大きな荷物を背負って来た弟に「がんばって持って行ってあげよ。」と言ってパンをくれようとした見知らぬ被災者の方。「お米は、お水は大丈夫？」と心配し連絡をくれた近所の方など、数えればきりがありませんでした。

『人は人の中に生き、生かされている。』という事が身にしみた三週間でした。

命あつての事

外科外来 金城邦子

前日、水族園のイルカが全然落ち着きがなかった。雲がおかしかった。など、後日色々な前ぶれがあったと新聞などでみた。我が家では、いつも父親と床に入る5才の息子は、私の布団に入ってきた。夜中トイレに行った後もなぜか又、私の布団にもどってきた。そのおかげでダンスにも、テレビにも、本棚にも下敷きにならずにすんだ。悲惨な状況をあげればきりが無いが、3週間もすぎればそれも少しずつ過去の事となり、とりあえず命があったことだけがありがたいと思える。家族が協力し生きていくために助け合っているのを毎日感じる事ができる。息子も少したくましくなった様に思える。命あつての事ではあるが。

(c)1995鐘紡記念病院(デジタル化：神戸大学附属図書館)

病院にたどりつくまで

西3階病棟 浜田泉美

地震直後、寝衣のままマンションから出たわたしは、今何時かという事が大変気になっていた。ちょうど日勤の予定となっていたし、看護婦という職業柄今日は休みたいと言うだけで休むと、業務に支障をきたす事はわかっていたのである。それに入院病棟は患者が常にいるため、仕事量はどんな時でも同じで、減る事はないのであった。恐る恐る部屋に戻ってちらかった服をつかんで着替えたが、電気もなく、たよりのペンライトもどこかにうもれており、暗闇の中である。外に出ると道路にひびわれが入り、どのように病院に行こうかと思っていると、偶然にタクシーが走ってきたため飛び乗った。運転手もやや興奮しており、お互いすごいですねというなり会話が續かない。病院の近くに知人がおられたため顔を見てから病院に行くことにした。近くから火の手が上がっており、病院に行くのがこわい気がした。急いで私服のまま病棟にたどりつく、詰所の内の棚はたおれてガラスが割れていたり、廊下の電気は消えたまま、防火扉の近くの壁が落ちていたり、非常灯さえも消えていた。とりあえず、今日一日をどのようにスケジュールを進めようとそれだけを考え始めた。何故自宅に行くよりも先に病院に来てしまったのか、夕方歩いて両親の家にたどりついた時涙が出た事を覚えている。

地震と私

5階病棟 山下久子

今まで、なに一つ不自由のないに等しい生活を送っていた私にとり、今回の地震は、かなりこたえた。そのうち、勤務中でも些細な事でイライラするようになったりした。水もガスもない、食糧も十分でない。どこへ行くにも足がない。余震が続き怖い、このような状況から逃れるには神戸を脱出するしかない、とまで考えた。患者も満足のいく看護が受けられていないと思うと逃避する気持ちに拍車をかけた。自分の身を守る事で必死で余裕がなかった。

今となって思うに、ここに無事に働き続けることが出来、逃げずに居れた根底には、神戸が大好きであり、また、助け合っている人間がいとおしく見え、素晴らしく思えたからだと思う。

皆の力で病院も刻々と変化してきている。無力さを感じつつも貢献できるよう頑張っていきたい。

最後に大震災により、亡くなられた方のご冥福をお祈り致します。

こわかった自転車通勤

5階病棟 瀬川美奈子

「困っている時はお互い様でしょう」と、半分倒れそうな自転車屋さんは快く売ってくれました。見慣れた町並みが一変して焼け野原になって、驚くよりも「こわい」というのが本当でした。

電車で通えば二十分程の距離は、自転車ではあまりに遠く感じられ、ボーツと乗っていようものならば、アスファルトにのりあがったり、倒れた木材に足をとられたりと気を抜けない数時間でした。交通手段が回復すれば時間がかかっても自宅へ戻ろうと思っていましたが、それも出来なくなり家族とも離れることになりましたが、すれちがう時に声をかけて下さった沢山の人の優しい気持ちを持ったままでの、一日も早く元の神戸に戻って欲しいです。

苦勞した通勤

5階病棟 米山陽子

17日朝、いつものようにそろそろ起きなければと思っていた矢先の出来事だった。とりあえず駅へ向かうが電車は動かず、高速道路、その他周辺の道路も通行できないと聞く。通勤できるようになるまで寮でお世話になることに寮から通勤。JRが須磨まで通るようになると須磨から自転車で通った。二号線は歩く人、原付きで駅へ向かう人などで溢れていた。夜勤の日は真っ暗で人通りの少なくなった二号線をひたすら自転車をこいだ。崩壊した家屋の合間をぬい、崩れ掛かった高速道路の下を走るのは心細く本当に恐かった。今、JRが神戸駅まで走るようになり、普段当たり前のように感じていた電車が目的地まで走ることの便利さ、ありがたさをつくづく感じている。

私と地震

6階病棟 加藤めぐみ

私は運が良い事に地震の日にはスキーをしに、長野県の白馬にいました。地震のことを知って、スキーを断念し、すぐ飛行機で伊丹にかけつけ、西宮から歩いて神戸に向かいました。しかし、東灘で日没を向かえてしまい、友達と一緒に避難所に一泊することにしました。そこでボランティアの人にあったかい肉団子を5個もらい、人の親切を肌で感じる事ができ、とてもうれしかったのを覚えています。

次の日、やっと寮に帰ることができ、病院に行くと、病院は想像以上に忙しく、知らない患者さんがいっぱい、物の配置も全然変わっており、とまどう事ばかりでした。今はやっと病棟も落ち着き、地震も随分前の事のように忘れがちになってしまっていますが、今回の体験を忘れず今後に生かしていきたいと思います。

恐怖の一言

6階病棟 藤原和子

寝ていた時に大きな揺れが来た。三回目位ゆれた後、屋外に出た。病院に電話しようとしたが通じなかったので主人に車で病院に行ってもらい休むことを伝えてもらった。一日目は家の片付けをしたが、電気の復旧のみで三日目に病院に出勤。交通機関の回復が不明なので、主人に車で送ってもらった。その後帰宅時は徒歩の為、車で40分のところ1時間半以上かかった。恐怖の一言。

震度7と私の記憶

7階病棟 石橋寿枝

5時半の目覚ましになる。いつもの癖ですぐには起きられない。5分間くらいしてから起きたと思う。洗面を終えてドレッサーの前に座ったときだった。ゴーという山鳴りのような不思議な音が聞こえ、ドーンという音とともに上下動に揺すぶられた。すぐにおさまると思う間もなく弧を描くような横揺れに変わった。揺れはますます大きくなりタンスの上に置いてあるものが落ち、タンスが倒れると同時に隣の部屋の本箱が倒れガラスの壊れるすさまじい音がしたかと思うと食器戸棚からは中のものが雪崩のように落ちた。一瞬の間に部屋の中は足の踏み場のないような状態になってしまった。私は8階に住んでいるので揺れもひどく、死の恐怖を感じながら揺れのおさまるのをひたすら待った。停電で部屋は真っ暗で何も見えない。恥かしい話だが、停電への備えは全くしてないかった。懐中電燈があればと痛切に感じた。電話の赤い小さな光が見えたので、病院の様子を伺うため手探りで番号をブッシュする。すぐに夜間警備員の方がでられて7階病棟につながった。患者さんには被害のないことを聞いてまず安心し、出勤が遅れることを報告して電話を切る。次ぎに電話をしようと思ったら不通になっていた。

その後も少しずつ揺れていた余震がおさまったので外に出てみると新長田の方向が暗闇の中で赤く染っている。かなりの被害が出るであろうと見当がついた。丁度同じころ隣の人と、その隣の人も出て来られて無事であったことを喜び合い、一緒に他の階の皆さんの様子を確認するため各階を巡回する。このマンションの誰にも怪我などなく無事であったことが本当に嬉しかった。困ったことがあれば声かけをするようにして別れる。気がついてみると私はパジャマのままだった。

病院へは歩くより方法がなかった。道中、道路は陥没して段差ができていたり、崩壊した家屋、今にも倒れそうになっている家の前を夢中で歩いていた。わずか1分足らずの間にこんな悲惨な状態になるなんて、今回の地震の大きさを改めて認識した。金平町、吉田町に来ると顔見知りの人も多く、声かけをしながら1時間半くらいかかってやっと病院にたどり着いた。

7時詰所に着いたとき、代休になっいるナースも全員出勤していて詰所の中は大分片付いていたところだった。私は詰所と外来を往復しながら思ったことは、もしこの地震が休日发生过っていたら出勤率はもっと悪く大パニックになっていたと思う。みんなよく働き新たな力を見出したと思う。

テレビの報道で増えゆく死者の数の悲劇を聞きながら思ったことは、1回きりの人生を、理不尽な力によって無理やり終わらされた死者たちの無念の叫び、生き残ったものの、突然家族や恋人と引き裂かれた人々の痛恨、築き上げてきた一切を失った被災者のあまりにも困難な未来、ローンを残しながら住居を失った人々の手厳しい現実などの無数の悲劇を痛感した。そして人々の愛も強く感じた。

共に働くことの喜び

7階病棟 赤松リエ

私は明石から通勤しています。今まで遠距離とは思っていなかったのですが、この度は兵庫を、病院を、本当に遠くに感じるようになりました。

「どのような気持ちで病院にむかったか」との内容で原稿を依頼されましたが、私にとっては震災から六日間「行かなきゃ。どうやって行く？皆はどうしてる？」この病院にむかえないもどかしさと悔しさにつぶされそうでした。二十三日から須磨まで電車が動き、通勤時間三時間、四時間かかりましたが「病院に行ける」「皆と一緒にがんばれる」という喜びと緊張感で病院にむかいました。一番大変だった時、その場にいなかったことは残念ですが、皆で力をあわせることの大切さ、よろこびを実感しました。

「温かいごはんが食べたい！」と本当に思いました

栄養部 細川真由美

5時46分、夏場なら早出当番が粥の鍋に火にかけている頃である。後5分遅く起こっていたら大変な事になっていたかもしれない。ライフラインを断たれ調理の出来ない中、事務長、松浦副院長他皆さんの尽力で本部よりオニギリとパンを、市衛生局からは朝夕弁当300個を回して貰えるようになった。患者に朝夕の400個を職員に200個を当てて足りない所は菓子パンで急場を凌いだ。

調理中断が長期化する中で、患者や出勤者の人数把握とその食事の確保には特に神経を使った。

1個の弁当を職員数人で分けあって食べた。中には、連日つづく菓子パンに「パンは嫌いだ」と怒る人や「弁当をよこせ」と押しかけて来る人もいた。しかし、この未曾有の事態を大過なく乗り切れたのは人々の善意のおかげに他ならない。全焼の家を置いて救援物資の果物を金沢から運んでくれた八百屋さん、香川県からうどんを届けてくれた材木屋さん、そして、被災しながらも出勤してくれた職員と、送り出してくれた家族に感謝したい。

最後に、ご不自由ご迷惑をお掛けした患者さん、職員の皆さんにお詫びいたします。

震災と私

栄養部 松本慶子

仕事では、9～11時間がかりで夜半にも届く物資の仕分け、献立作成、食数の把握、食事の配膳などに追われた。

人手も少なくどうなるかと思ったが、家の片付け、長時間かかる通勤、連続勤務など、それぞれ大変で不満もある中、お互いにカバーし合って1日1日をこなした点が大きな収穫だった。

個人としては、電車、バス等で初対面の人同志気軽に話したり、さり気なく助けられたり、街の“がんばれ神戸”のスローガンや、無事を知らせる張り紙に涙が出た。また筋肉痛をおこさずに往復2時間を歩き通せ、思わぬ成果に驚いた。

最後に不備な点が多々あったことをおわび致します。

悪夢という名の地震

中央放射線部 大屋寿一

地獄かはたまた悪い夢を見ているのか空襲の後にはこんな様だったのか色々な思考が頭をよぎっていた。どのような道を通ってきたのかも正確には思い出さない。今よみがえるのは火の海と瓦礫と化した家々である。

病院に入るともはや病院も野戦病院化していた。走り回るナース、ドクターそして次々に運び込まれる負傷者。しかしそれを横目で見て地下へ。放射線の機器は大丈夫か。撮影室を回る。なんとか撮影はできる。撮影が必要な患者さんは地下へ。それからは撮影の嵐。次々に撮影にくるが重傷が多く時間がかかる。あせり、そして苛立ち。そんな中で技師も続々と駆けつけてくれる。ありがたかった。無事でよかった。しかしまだ全員の安否が確認できない。あせる。一階に戻るとその様相はますますひどくなっている。ほかに自分の出来ることはないのか。腹が立った。それでも担架を担いだり介護したり自分の出来ることをした。ふと、職員みんなが一体になっているなと感じた。ドクターもナースも技師も関係なかった。みんな必死だった。頭の中を昔の職場は毎日がこんなだった。戦争だったという思い出が過ぎていった。

そのうちに親や兄弟の安否が気になってきた。と同時にこんなに時間が過ぎてからこういう思いになる自分に対し複雑な気持ちになった。

次から次にいろんな事が脳裏に浮かんでは消え浮かんでは消えていった。こういう風に時が過ぎていった。

今思うと技師なんて機械がなければなんと無力な職業かと痛切に感じる。また、あの崩れさった家々から救出している人たちを横目で車の窓から見ながら通り過ぎて病院に行った行為は正しかったのか。あの人たちと一人でも多くの人を救出すべきだったのかという思いにかられる。

阪神大震災と病院コンピュータシステムについて

システム課 八木真悟

今回の阪神大震災は当病院の施設、医療機器などにおいても多大な被害を与えた。また、その中でコンピュータシステムに与えた被害もけっして少ないものではなかった。被災中心地の神戸市兵庫区に立地している割には、その被害は他の近隣病院、企業などと比べ軽いものですんだといえるが、震災直後、その後の復旧の過程での混乱は、テレビ、新聞などマスコミに報道されているとおりである。

鐘紡記念病院は、兵庫区の浜手に位置し、病床数242の中規模病院である。鐘紡の企業病院としての一面を持ちながらも、患者の大多数を近隣地域に依存した地域密着型の病院として成り立っている。コンピュータシステムは、IBMの中型コンピュータAS/400をホストとし端末、印刷装置等を約130台余り接続している。外来、入院の処方、検査オーダーをはじめ受付から医事会計まですべてのシステムをこれにより一元管理している。

震災直後のシステムの状況は、まさに不幸中の幸いであった。テーブラック、本棚などが倒れ、書類などが散乱する中、4台あるホストコンピュータラックが前後左右にかなりずれていたが、幸い損傷を受けることなく立っていた。停電による異常終了状態で、手動による起動によりとりあえずホストのみは正常にもどせた。その後、各部署の端末、印刷装置などを点検、落下などによる十数台の損壊機器が判明した。外来を優先して機器の配置替え等で応急的に復旧した。震災当日と翌日は、震災による患者の多さと医師、看護婦さらに事務など職員の不足による大混乱のためシステムを使用するまでに至らなかった。しかし、出勤する職員が次第に増え始めた震災後3日目(1/19)より、変則ではあったがシステム運用を開始した。

このように、システム復旧までに2日間という一見スムーズな回復の様にみえるが、病院として機能するには早期にシステムを回復する必要があると判断し、昼夜を問わずシステム復旧にあたった結果である。地震直後は、先述のように患者殺到と職員不足、さらに避難者で大混乱となりシステムどころではなかったといえる。しかし、通常、システムにより各部署に連絡されていた処方、検査のオーダーおよびカルテの出庫等すべてが人による伝達となり混乱に拍車をかけている状態だった。現在の病院はコンピュータシステムを大規模に取り入れて成り立っている。本来、コンピュータがなくとも病院業務はできる。しかし、現在の病院ではコンピュータは不可欠なものの、例えばある特定の医療機器のような存在になっているようである。これらを総合的に判断して、出勤できる職員は少なかったがそれらを総動員して医事会計などを除くシステムの一部を早期に稼動することにした。

これまで当病院では地震を想定したというものは特になかったが、いくつかの災害時対策を設けている。ホストコンピュータのデータのミラーリング(二重化)、定期的なデータバックアップさらに無停電装置の設置、停電時の自動終了などソフトとハードの2方向から考えられ、これらによりデータの保護についてはある程度保障している。また、地震対策用ではないが、大阪本部と専用回線が結ばれており、これは公衆電話回線が寸断され各地との連絡がとれない中、メッセージの送受信処理で状況報告、救援依頼などに有効だった。一方、障害時の運用については、これについても取り決めは存在し、文書化されている。が、ハード面(データの保護)に比べ、障害時の運用に不備な点が目立った。今回のものは、半日程度のシステム停止を想定した運用マニュアルの範囲を越えたものだったといえる。

これまでの常識を越えた今回の地震は、都市機能やその中での医療機関としての病院のあり方など多くの問題を提起したが、そういうグローバルな問題だけでなく個々の病院、そしてそこで働く従業員一人一人がそれぞれ今回のことを教訓として考え検討していかなければならない。当病院のシステムにおいても、まず、もう一度すべての防災対策を見直し、ハード、ソフトの状況確認と強化、さらにシステム障害時の運用マニュアルの検証と徹底が今後の課題のように思われる。

4月現在、病院業務はほぼ平常に戻りつつあるが、患者の疾患傾向、患者数はまだ震災まえとかなりの差がある。一日も早い神戸の復興を期待したい。

1・17比較しようのないあの恐怖

医事課 塩谷安朗

連休を京都の妻の実家で過ごし、1月17日午前零時すぎ車で兵庫区の自宅に戻って来た。

布団に入りまもなく、これが現実だと思えない激しい地震。タンス、テレビなどが信じられないような激しい揺れを打っている。とっさに自分の掛け布団を家族の上へ投げかける。たったそれだけのことしか出来ない、何と非力なことか。幸いにも転倒したタンスや落下したテレビは家族を『的』にすることがなかった。はば同時に、近所の屋根瓦がガシャン、ガシャンと落下して音を立てている。窓を開けるが夜明け前で状況が判然としない。「○○さん大丈夫ですか？」と隣近所で安否を気遣う大きな声。とても平常でいられない、まさしく異様。

停電のため足探りで階段を降りると「まさか！」と疑わずにいられない事実。特大の本棚の転倒とともに居間一面にはガラスが散乱。あらゆるものが倒れ、転がり、足の踏み場もない。鍵をかけておいたはずの窓が烈震で開いている。

屋外に出るとラジオから「震源地淡路島北部。マグニチュード7・2。神戸震度6」と繰り返す声が耳に入る。あの放送は、今も耳から離れない。やや離れた商店街から黒煙りが立ち上がり、近所の井村さんが実家がやばいと商店街へ駆け出す。

家に戻ると電話の鳴る音がするが、間に合わず。だが、電話が既に復旧していることを知ることとなる。やがて、冷蔵庫のモーター音が響き、電気の復旧を告げる。予想外に早いと感じる。

家族を二階にとどませ室内の片付けを始めようとするが、ままならず。近所の男性に力を借りねば起こせない家具類。注意していてもガラス片が指にささる。つけっ放しのテレビでは、わずか数時間前に通過した阪神高速神戸線が臨終している。ほんの時間の差に、身が震える。

昼過ぎ、医事課の中村さんから電話があり、医事課だけ男性がおらず女性五人が頑張っているとの報。足の踏み場を確保できた程度の室内に、余震を畏怖する妻や幼い子供を残して出勤するのには実際のところ躊躇があったが、とりあえず病院へ向かう。

臨時の診察場となった1Fロビーには、軽トラックやバンに寄せられた患者が続々と運ばれてくる。畳に寄せられたまま運び込まれる姿も。霊安室や外科外来の遺体のうち、子供三人兄弟が含まれていることに胸が痛む。

医事課内部も書類などが散乱。カルテもラックから崩れ落ちているが、致命的な打撃を受けている様子はない。

地震3日後から事務当直のほかに事務当番制ができた。初回の20日夕方から翌21日までの当番になり、夜間受付や医事カウンターで急患対応にでんてこ舞い。21日の土曜日は、落ち着きを取り戻しつつある周囲の状況から考え、当初、夜間受付での対応を予定していたが、8時を過ぎると患者が絶え間なく来院し、急遽1Fの眼科、耳鼻科の診察室を使って内科と外科の診察を開始することとなった。

カウンターには、受付兼カルテ出しが古川課長、飯沼係長、塩谷の男三人、会計が放射線科の岡田君、薬局窓口が看護学生さんという豪華なスタッフが顔を並べた。今ではとても想像できないメンバーである。やがて昼前には寄宿舍の女性三名が応援に入ってくれ、何とか体裁のとれたカウンターに戻った。

地震後の非常時の中、各人の協力、連携は素晴らしかったと思うが、医事課では寄宿舍の女性三名の活躍がとりわけ印象深く残っている。

復興への足取り



復興への足取り

- 2月1日 人間ドック本日から一日ドックのみ再開又連絡バスの運行も再開。
- 2月2日 救援御礼の為院長、事務長本部え挨拶。ハーバーランドより船にて大阪へ。
- 2月6日 宿泊して活躍した人達の慰労。院長よりのすきやき食。於講義室
- 2月11日 6階患者鹿児島へ自衛隊ヘリで転送。外科井上医師が付き添い。
- 2月13日 東京 桃井かおりさん親子よりの見舞を配る。
 - 13日 1階患者藤原伸一さんのビデオをテレビ朝日が放映。
- 2月17日 鐘紡社内の震災見舞金を配布。
- 2月20日 合宿している人達の慰労。事務長よりのカニすきパーティ。
- 2月23日 2月度理事会開催。
- 2月25日 院内研究発表会開催。広島大学小山氏の講演と「非常時の医療について考える」の発表。
- 3月2日 都市ガスが来たので、食堂を平常通りに戻す。
- 3月14日 医局主催の合宿打ち上げパーティ。
- 3月15日～4月19日迄
 - 心身医学会によるボランティア活動。
- 3月18日 心身医学会会長来院。
- 3月26日 福井テレビが西3階肥田木さん取材。
- 3月29日 3月度理事会開催。

3月31日 平成7年度新入生入社式。

(c)1995鐘紡記念病院(デジタル化：神戸大学附属図書館)

地震のあと長い間病院で生活をして

外科 森 琢磨

平成7年1月17日の兵庫県南部地震の当日灘区の自宅をいつものように出て、病院に午前9時前に到着した。病院内は怪我をした人々で混乱していた。私も外科医として1階のロビーで怪我をした人には傷の処置を行い、重症の人には救命処置を行った。この日より4月までの3ヶ月に亘り病院内で生活するようになるとは思ってもかけなかった。この3ヶ月を通して、異常な環境の下で引き出された人間のバイタリティー、あるいはしたたかさを知ることになった。

地震は地球の構造上、われわれにとって宿命である。昔から数え切れないほど多くの地震がこの日本でも発生している。20世紀にもマグニチュード8以上の巨大地震がいくつか発生している。

千島カムチャッカ海溝では、1918年（M8.0）、1952年（十勝沖地震,M8.2）、1958年（M8.1）、1963年（M8.1）の4回。日本海溝で1933年（三陸沖地震,M8.1）、南海トラフで1946年（南海地震,M8.0）、琉球海溝で1911年（喜界島地震,M8.0）である。この他、南海トラフやその東方延長の相模トラフでは1923年の関東大地震（M7.9）と1944年の東南海地震（M7.9）が発生している。共に地震の規模では大地震に属するが、被害や社会的影響は他の巨大地震にひけをとらない。ことに15万人近い死者、行方不明者を出した関東大地震は日本の進路にも大きな影響を与えた。

このような地震災害を幾度もくり返し経験しても、人間は何もなかったかのように甦り、文明をも退化させることはなかった。むしろ災害を経験することにより、より知恵をつけ文明を発展させてきた。人はどこでも辛抱強く、活力に富んでいるものである。われわれは今回の地震でこのような人間の生き方を経験した。

この原稿を書いている4月下旬から、かなり記憶は薄れつつあるが、過去を振り返って病院内での生活を思い出してみることしよう。

地震直後より水、ガスの補給がとまり病院の機能はかなり低下していた。しかし不幸な状況の中にも幸運であったことは病院の建物の被害は軽微であり、職員、入院患者さんにも人的被害はほとんどなかったことである。外科医の仕事である手術もでないような状態であった。しかし病院の職員の知恵と体力により病院の機能は急速に回復していった。エネルギー源である電力と重油はかなり早い時期から手に入れていたので、本質的には水を確保することにより病院機能は回復したのである。

われわれはこのころ、鯖、鰯などの缶詰や差し入れてもらったおにぎりを食べて生活をした。本社の女性社員が作ってくれたおにぎりもバイクで運ばれ、感謝して食べた。看護学生の一人がうめぼしのおにぎりチョコレート1ヶを持ってきてくれたこともあった。現在手術室勤務のSさんである。栄養のバランスはとれていなかったが、それどころではなかった。また色々なインスタント食品も経験させてもらった。

かなりの職員の人々が、道路、鉄道線路が破壊されたため、5階講義室、応接室、ドックの室、生理検査室、さらには看護部長室の前の通路の辺りなど、院内の色々な場所で寝泊りをしていた。看護部長室の前の辺りで寝ていたI課長は寝床を別の場所に移して、4月になっても病院内で生活をしている。阪神電車が完全復旧するまで頑張るそうである。

この時期みんな、今まで経験した事のないことを経験し、結構楽しんで生活していたのかもしれない。4階の事務当直室で、広島原爆を経験したM先生は、ぼくはこんな危機的な状況を一生のうち2度も経験し、生き残っていること自体、強運の持主や、と自慢していた。U院長、K事務長はT看護部長に夕食を作ってもらい、たまにはI係長（料理長？）のビーフシチューとかもあったが、みんなで楽しくごはんを食べていた。4月になり、この3人はU鮎屋さんで、慰労会をして料亭（？）を解散したと誰かに聞いた。看護部長室の前の辺におでん屋とかうどん屋さんが、でていた時期もあった。私も無理やり食べさせられた。私はとていばいつも2階で風呂に入り、近くのYさんの開いている飲み屋さん（？）で缶ビールを飲みその後自室に戻り、宇宙論に関する、難しく、今でもはっきりと解からない本を読んで眠っていた。病院で寝ていると良く寝なくて疲れるでしょうと言う人もいたが、そうでもなさそうな気がした。この頃北区に食事に行く事が流行っていた。そこにはわれわれの生活している所にはない色々

な食べ物があった。

カラオケもパチンコ屋もあった。北区に風呂にはいりに行く人もいた。このために北区の水が異常に減っているという話も聞いた。守衛のTさん、Aさんに御影の鮎屋さんに連れていってもらった。途中43号線を通り、高速道路がなくなっているのを見て、何か非常に遠い昔の風影を見ているような気がして、変な気持ちになった。しかし鮎はおいしかった。日本酒をたくさん飲んでしまって病院の前の道路で吐いてしまった。

家族が高松に疎開していたので、2週間に1度洗濯物を持って帰った。淡路、徳島を通って帰ったのであるが四国の人口は少ないとつくづく思った、四国は人口が少ないのに医学部が4つもあり、その医者とは多分ハングリー精神が旺盛だろうなあ、と以前院長が言われていたことがちらっと頭をかすめた。

また六甲のマンションにも時々片付けに行った。しかし仕事が終わるとすぐ病院に帰りたと思った。

こうしているうちに病院は順調に機能を回復し、水道は修復され、JR在来線、新幹線も開通した。桜の花も散り、病院もほぼ以前の状態になっている。私も六甲のマンションに戻り生活するようになっている。市街地も順調に回復している。今回院内のあらゆる人々と親密に付き合ってもらった。みんなタフで、バイタリティーに富んで、人情味あふれる人達であった。

公開講演会のお知らせ

主催 日本心身医学会

震災後、当学会では全国の専門医によるボランティア医療チームを結成し、避難されている学校、集会所への巡回や、地元病院での心身症相談活動が続けておりますが、今回、震災によるストレスが引き金になり不眠、食欲不振、片頭痛などの症状で悩んでおられる皆様を対象に公開講演会を開催することと致しました。

1. 日時 4月8日（土）PM1：30～3：00
2. 会場 鐘紡記念病院（兵庫区御崎町一丁目）
3. プログラム PM1：30開会
司会 三菱病院副院長 土屋五郎
講演「心と体の健康を取り戻すために」
講師 神戸大学名誉教授 上羽康之
（鐘紡記念病院院長）
PM2：30 質疑応答
PM3：00 閉会
4. 定員 150名（先着順、無料）
5. 開催 主催 日本心身医学会
共催 三菱神戸病院
鐘紡記念病院

《お問合せ先》鐘紡記念病院事務部 681－6111

「心身医学の講演を聴いて」

山本了弘氏

4月8日（土）に行われた心身医学の講演を聴きました。このたびの震災で私たちが直面している問題等を題材としたわかり易いお話と、加えて私の質問に対して丁寧にお答えいただきまして、本当に良い講演でした。今後また開催されます時は、また拝聴したいと思いますので、御案内下さいましたら幸いです、どうもありがとうございました。